

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題

——リソルジメントの解釈を中心として——

中 川 政 樹

序

地理的呼称としての「イタリア」は、古くより用いられてきた。だが、地域として存在した「イタリア」を包括する政治的統一体すなわち国家の呼称として用いられることとなったのは、実に一八六一年の「イタリア王国」の成立によってである。十六世紀以来、イタリア半島は諸邦に分割され、その多くは外国支配のもとに隷属状態にあった。

たとえば、復古時代(Restaurazione)の一八一五年当時のイタリアに おいて、法王領(Stato Pontificio)を除けば、独立国は北部のサルデーニャ王国(Regno di Sardegna)のみで、ロムバルド・ヴェネト王国(Regno di Lombardo-Veneto)およびトスカナ大公国(Granducato di Toscana)はオーストリアの、両シチリア王国(Regno delle Due Sicilie)はスペインの支配下にあった。このような分裂と外国支配の状態から脱し、民族統一の達成と独立国家の設立をめざして十八世紀から十九世紀前半期にかけて展開された運動が、いわゆるリソルジメント(Risorgimento)と呼ばれているものである。リソルジメントはイタリア半島に統一された近代的民族国家を生みだすばかりでな

く、それは必然的に統一にとって極桎となる旧来の政治的・社会的諸関係を変革することを要求された運動でもあった。

リソルジメント期に、さまざまな勢力によってイタリアの独立と統一国家形成への道が模索され、それをめぐって激しく争われた。その過程で示された目的および方法は、時代的狀況のもとで少なからぬ制約を受けねばならなかったにせよ、リソルジメントは近代イタリアの出発点として多様な可能性を提示していたがゆえに、その選択はのちのイタリアの発展に多大な影響をおよぼし、その進路を厳しく規定したのであった。その後のイタリアが示した政治的・社会的現象、とりわけ統一王国の形成からファシズムの抬頭にいたる一連の現象の遠因を、最終的にサヴォイア(Savonia)王家を中心とするピエモンテ(Piemonte)王国のイタリア的拡大という解決方法をとったリソルジメントの内包する諸要因に求めることは、さして困難ではない。また政治思想史的領域において、愛国主義から帝国主義へさらにファシズムへと流動した主要潮流にかんして、リソルジメント期の思想と運動に内在する諸性格に、その規定的要因をみいだすこともできよう。近代イタリアの歴史、思想史を検討するとき、リソルジメント期の諸状況を

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題（中川）

めぐる諸問題を看過して論ずることは不可能であり、この分野の研究家をしてたえずそれらの問題へとくりかえし立ち返ることを余儀なくさせているものは、まさしくリソルジメントのもつかかる重要性による。もちろん、リソルジメント以後の歴史的事実を、その過程において作用した諸要因を慎重に考慮することなく、直接的にリソルジメントの内包した諸要因との関連において論ずることは、妥当とは言い難くむしろ危険性をともなう。そのような意味においてのリソルジメントの意義を過大視する傾向を戒めながら、近代イタリア史の道程におけるその重要性を明らかにすることが必要であると思われる。

イタリアにおけるリソルジメント研究はその運動の発生時より始められたといえるが、とりわけファシズム体制の終息後、イタリア近代史の批判的再検討が促され、さまざまな立場と方向から進められた。それらは政治的立場・地域的位相の相違に、さらにリソルジメント自体の複雑で矛盾した要素も加わって多くの解釈を提出した。他方、わが国のイタリア史研究、特に政治史・政治思想史の領域においては、他のテーマとの関連においてたかだか補足程度に触れられているにすぎず、そこにあらわされているリソルジメントの解釈もリソルジメントそのものの検討を経て得られたものとは言い難い。しかし、この問題は、前述のようにひとたび近代イタリアの政治と思想を歴史の全体的発展の過程で考察しようとするならば、当然、目を向けられねばならない課題である。

本稿は、こうした観点から近代イタリア史におけるリソルジメントの意義を明らかにするために、その解釈を中心に論を進めてゆきながら、リソルジメントを規定した諸要因を検討、整理し、問題点を提示

せんとするものである。

一、リソルジメントの解釈

リソルジメントとは何か、この問いにたいする回答は容易ではない。なぜなら、それはさまざまな複雑な要素および問題を含んだ運動であったからである。統一への反対派と賛成派、それらの中で諸々の立場、またそれに由来する目的・手段の相違と相互対立、経済・社会構造と社会的諸階級、南部問題、ヴァチカンの存在、外国勢力と国際関係、これらすべてが相互に影響しあい、リソルジメントの方向を規定したのであった。⁽¹⁾ここでは、これらの諸問題は指摘しておくにとどめねばならないが、それらを視野に置いた上で、基本的問題として、リソルジメントは何を *ri-sorga* しようとする運動であったかという疑問⁽²⁾つまり、*ri-organe*（＝再興する、甦らす）が、歴史の上で何を意味したかという問題が、まずとり上げられねばならない。

「リソルジメント」という用語は「イタリア政治史の中に」存在する「外国語に訳すのが困難な、また時には不可能でさえある一連の表現」の一つであり「イタリア民族の歴史並びにイタリア文化史の把握⁽³⁾方という伝統的なものと密接に結びついた」概念を示す用語である。それゆえ「リソルジメント」は、政治的意味においてよりもむしろ精神的・文化的意味において用いられてきた。「リソルジメント」という語が、他の『国民的リスコッサ』(*riscozza nazionale*) とか『国民的リスカット』(*risatto nazionale*) などの表現とともに、「狭義の国民的・政治的意味で使われたのは一八〇〇年代である（傍点―引用

者⁽⁵⁾。』リソルジメントの政治的意味内容が一八〇〇年代に生れたという事実、それがまさしく当時の政治状況によって生みだされたものと理解されねばならない。分裂と外国支配の下での不幸なイタリア政治の現実が救いを求め、何ものかを risorgere することを要求したのである。なぜなら、「これらの語はいずれも過去に存在したある状態への復帰、ないしは分散している民族的エネルギーが一定の集中的・軍事的核心のまわりに、攻勢的に回復されること（『リスコッサ』、あるいはある奴隷状態からもとの自主性へと復帰する解放（『リスカット』）といった意味をもっている⁽⁶⁾）からである。それゆえ、「リソルジメント (Risorgimento) はかつて存在し、しばらくの間存在を中断しており、そして再現へと復帰する何ものかを意味する⁽⁷⁾」と解されよう。『リソルジメント』は、古代ローマから近代統一国家の形成にいたるイタリア半島に展開された歴史的背景をもち、そこからギリシャ・ローマ文化が再生 (Rinata) し、国民が再興 (Risorta) することを意味するものと考えられるのである。

このように過去の理想状態への回帰をめざすことによって、新たに国民的再興を計り、政治的には近代的統一国家を形成する過程は、政治力学の場では政治的変革ともなわねばならず、必然的に革命でなくてはならない。そこにおける運動の主体の意図と実際に達成された成果およびその間に介在した諸事実等々をめぐって、その政治的変革＝革命をいかなるものとして評価し解釈するか、これがここに言うリソルジメントの解釈の問題である。いろいろな革命の評価と同様、リソルジメントにかんして、政治的・イデオロギー的立場の相違によっ

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題（中山）

て、さまざまな解釈が提出された。諸解釈のうちこれまで普遍的であった二つの立場は、次のようなものである。

まず第一は、リソルジメントを国家統一の主動力となったピエモンテ王国、サヴォイア王家によるイタリア諸国あるいは半島諸地域の併合・吸収の運動と解し、ピエモンテ王国の拡大的領土形成過程をリソルジメントの過程とみなす立場である⁽⁸⁾。この説はリソルジメントの終期に形成され、サヴォイア家の神話 (mito sabaud) と結びついて新王国の初等・中等教育の中で公式論化されて、のちのファシズム時代の国家主義的傾向の中で支配的理論であった。この立場は、risorgere されるべきものは西欧列強に対抗しうる統一国家であるとし、サヴォイア王家の領地のピエモンテから全イタリアへの拡大＝統一国家形成の中にリソルジメントの過程を縮少する。すなわち「王の征服」である。その解釈基準は国家的観点にあり、政治的・領土的・国家的事実としてのリソルジメントの解釈といえよう。このような立場にはもちろん難点が存する。それは、この解釈がリソルジメントをピエモンテ王国の領土的拡大の運動と解することによって、サヴォイア王家が統一への活動に乗り出す以前の歴史的事実を考慮せず、あるいはまた、ピエモンテ王国およびサヴォイア王家と関係なく発生した諸事件の重要性を否定するところにある。したがって、たとえば、サヴォイア王家のイタリア統一と直接的関係なくイタリア諸国家の内的構成の変化をねらった一八二〇年のナポリ革命、一八四〇―六年のロマーニャの騒乱、さらには一八二一―四八年のナポリ王国における反乱等々のリソルジメントにおいて占めた意義が無視されることになる。さらに重要なことは、この説にしたがうと、ピエモンテ勢力と対立した反

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題（中川）

対勢力は、たとえばマツチーニ (Giuseppe Mazzini) のようなリソルジメントの指導的思想家・活動家でさえ、反ピエモンテの態度をとったがゆえに反リソルジメントの勢力ないしリソルジメントへの敵対者とされるのである。このような論理的帰結が歴史的事実と合致しないことは言うまでもない。

第二は、リソルジメントをイタリアの近代化の一過程とみなし、外国支配からの解放・国民的統一、さらにはより自由な制度の成立をめざす国民運動と解する立場である。⁽¹⁰⁾ この立場は、前説がリソルジメントを純粹に国内的事実と解する傾向をもつのにたいして、ヨーロッパ史の一つの環としてのイタリア史の中に、リソルジメントを位置づけようとする。西欧先進国の辿った道程、すなわち内外の絶対主義勢力にたいする自由主義勢力の闘争、自由の獲得による新たな政治的・社会的・経済的さらには文化的諸關係を創りだすこと、そのことによって先進的ヨーロッパの進歩の脈絡の中に後進的イタリアを再挿入する作業こそ、リソルジメントの課題なのである。ヨーロッパの発展という視点からリソルジメントを把握するかぎりにおいて、ヨーロッパ的なものとイタリア的なものとの共通性の強調、とくに、真にイタリア的なものはヨーロッパの精神と同一であるとの前提がその根底に存する。まさにこの点において、かかる立場はリソルジメントの特殊的イタリア性を過少評価することになる。したがって、この解釈はリソルジメントの過程さらには意義をイタリア史との全体的関連性の上で論ずるよりも、ヨーロッパ先進国の発展を範としてイタリアの発展を叙述することによって、リソルジメントを生みだしたイタリアの内的発酵素を無視しがちである。先進的ヨーロッパ諸国の辿った道とは異なった後

進的イタリアの発展の過程を正しく把握することが必要であろう。

これら二つの立場とは別に、リソルジメントを「革命なき革命」・欠陥ある革命と解し、その原因究明を運動の主體的勢力の問題、とくにその政治指導の問題を中心として論ずるグラムシ (Antonio Gramsci) からマルクス主義的立場からの研究が活発な論議を展開している。これについてはのちに詳しく論じよう。

このようなリソルジメントの解釈にかんじて戦後論議の集中した問題は、リソルジメントの起源とりわけ歴史的運動としてのその始期・終期をめぐる問題であった。ここでそれに言及しておこう。なぜなら、これは主としてリソルジメントの歴史的叙述の領域における問題であるが、同時に前述のような解釈と緊密なつながりをもっていたからである。終期については、イタリア統一国家の設立を告げる歴史的事実の存在からして、(一)、一八六一年三月のイタリア王国の誕生をもって終期とする説、(二)、一八七〇年十月法王領の併合によりローマを首都とするイタリア統一国家の完成の期日を終期とする説、が挙げられる⁽¹¹⁾。これらは単に統一国家の伸張の過程に差異をみいだそうとするものにもすぎず、その相違点についての論議はさしたる重要性をもたない。だが、始期にかんじては種々の所説が提出されており確定困難である。それらを整理すると次のようになる。リソルジメントの起源をフランス革命以前に求め、その過程におけるフランス革命の影響を第二次的なものと論ずる立場として、(一) ユトレヒト講和条約によってサヴォイア家の領地拡大および国王称号権を得た一七一三年とする説、⁽¹²⁾ (二) 十八世紀前半のスペイン王位継承戦争の結果、イタリア南北諸地方におけるスペインおよびその影響下の絶対主義支配体制が崩壊し、オース

トリアがイタリアに進出することとなった一七四八年のアーヘン講和条約とする説⁽¹³⁾。つきに、起源をフランス革命との関連において把握しようとするものに、(三)イタリアのみならず全ヨーロッパに自由の理念を宣言した一七八九年のフランス革命を始期とするもの、(四)その理念がイタリアに普及するうえで大きな役割をはたしたフランス軍のイタリア侵攻の年、一七九四年とする説。さらに、イタリアにおける国民運動の発生に始期を設定しようとするものとして、(五)イタリア各地の人民の間に国民的感情が広がり、各地で暴動が相次いだ一八四六—九年の革命期とする説⁽¹⁵⁾が指摘できる。

リソルジメントの起源についてどのように考えるべきであろうか。前述のように、リソルジメントという語はイタリア文化的統一の理念として既に十五世紀にその起源をもっており、それ以前にも、ダンテ(Dante)、ペトラルカ(Petrarca)の中にその理念が表明されていた。

また、イタリアの国家的統一への願望は、十六世紀にマキアヴェッリ(Machiavelli)の著作のうちに外国支配からの解放者の出現への期待となつて表わされていた。かれらはフィレンツェの市民であった。しかしながらイタリアのあるいはトスカナの市民としての意識を得ることができなかったがゆえに、かれらの願望および理念が都市の城壁を越え出ることとは可能であつたとしても、さまざまに分裂し分割されたイタリアの政治的現実を变革するものとはなりえなかつた⁽¹⁶⁾。リソルジメント期の分割されたイタリアにおいても、統一のためには地域的帰属意識を乗り越える国民的意識の確立および普及が不可欠であり、かつそれらが国家統一をめざす具体的政治行動となつて展開されることを必要とした。このように見るならば、リソルジメントの始期を、分

割された諸邦の境界を越えた、イタリア国民性^(italianità)の自覚とそれにもとづく政治行動のあらわれの中にみいだすのが妥当といえよう。だがそれにもかかわらず、リソルジメントの起源を具体的個別的事件に求めることはどれだけの意義があるであろうか。チェッシ(Roberto Cessi)が述べているごとく、「リソルジメントという名称に年代的期間としての意義を拒む……」べきであり、さしたる意義をみいださない。この問題はリソルジメントの解釈に付随するものであつて、第一義的な意義をみいだし難いのである。「問題は年代的期間にあるのではなくて、革命的過程の政治的・社会的価値、その過程の発生、その連続性および一七〇〇年代の危機から一八〇〇年代のいわゆるリソルジメントにかけてつぎつぎと実現されていく諸局面においてその過程がとつた諸側面にある……」⁽¹⁷⁾という主張が、妥当といえるであろう。

前述のようなさまざまなリソルジメントの解釈の中で、とくに大きな影響をもつたものは、現代イタリアを代表する二人の思想家クロッチェ(Benedetto Croce)とグラムシのリソルジメント論であろう。前者は自由主義的立場、後者はマルクス主義的立場からのものである。以下では、この両理論をとりあげてみよう。

- (1) A. Gramsci, *Risorgimento*, 1966, p. 108.
- (2) L. Salvatorelli, *Peniero e azione del Risorgimento*, 1963, p. 13.
- (3) A. Gramsci, *op. cit.*, p. 36. (山崎功監修「代久二編集」『グラムシ選集4』一九六三年、一八一頁)
- (4) L. Salvatorelli, *op. cit.*, pp. 15-16.
- (5) A. Gramsci, *op. cit.* (前掲『グラムシ選集4』一八一頁)

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題（中川）

- (6) A. Gramsci, *ibid.* (前掲書)
- (7) L. Salvatorelli, *op. cit.*, p. 16.
- (8) その代表的論者は、バルボ (Cesare Balbo) ・ダゼリオ (Massimo D'Azeglio) 等。cf. M. Ruini, *Pensatori e politici del risorgimento-ento e risorgimento d'Italia*, 1962, pp. 95-8.
- (9) L. Salvatorelli, *op. cit.*, pp. 37-40.
- (10) その代表的論者は、クローチェら自由主義者。
- (11) 他に、極端な愛国主義者によって、第一次大戦終結の結果、イタリアの北部境界がアルプス国境と確定した一九一九年が主張された。
- (12) いわゆるサヴォイア主義者、すなわち、前述のリソルジメントの解釈のうち前者を支持する人達の多くは、この説を主張している。
- (13) 連邦主義の説である。連邦主義とは、ヴィンチェンティ (Vincenzo Gioberti) によって主張されたもので、立憲化されたイタリア各邦の連合によって統一を成就し、その宗主としてローマ法王を戴かんとするものである。かかるカトリック的立場とは別に、カッタネーオ (Carlo Cattaneo) ・フェラーリ (Giuseppe Ferrari) らは、共和主義的立場から連邦主義を提唱した。cf. M. Ruini, *op. cit.*, pp. 87-94.
- (14) 前述の自由主義的立場からの主張である。(註) ②の両説の相違は、極めて重要なものとは言えず。
- (15) Cf. D. Mack Smith, *Il Risorgimento italiano*, 1968, pp. 216—324.
- (16) D. Mack Smith, *ibid.*, chap. VIII.
- (17) Istituto Antonio Gramsci, *Studi gramsciani*, 1958, p. 49. (ケラムシ研究所編『ケラムシ研究』一九六三年、六一—六四頁)

二、クローチェのリソルジメント解釈

クローチェは、歴史にかんする最初の理論的著作、「芸術の概念に包摂された歴史」(La storia ridotta sotto il concetto generale dell'arte, 1893)と題した論文において、歴史は芸術、少くとも極め

て特異な種類の芸術であると論じた⁽¹⁾。かかる立場は、その後、歴史と哲学的方法の結合によって、歴史はたんに芸術の一形態であるよりもっと概念的なものであるということとどまらず、真実には人知の総括をなすものだとの見解に発展させられ、歴史の方法論として歴史のうち哲学を包摂してしまうこととなった。「真の歴史はすべて同時代史である」という命題は、歴史認識の本質が想像的再創造による過去の把握にあり、歴史的精神によって事実を確認し判断されない「歴史」は、「年代記」―「死せる歴史」―以上のもではないことを明らかにした。⁽²⁾「……精神そのものが歴史であり、その存在のあらゆる瞬間における歴史のつくり手であり、またすべての先行する歴史の結果でもある、という原理から出発するのでなければ、歴史思想の現実の過程のなにもをも理解することは不可能であろう。」⁽³⁾

「精神の歴史」において、政治はなお歴史の主題である。しかし、大切なことは、政治についての叙述をそれに人間活動の他の分野からの「道徳的」要素を加えて、より高い平面にひき上げることにある。歴史の主題についての「倫理―政治的」な定義は、精神の倫理的・道徳的価値を具体化するための自由との関連において論ぜられ、いまや歴史は「自由の歴史」(storia della libertà)として理論づけられた。「歴史意識と自由の意識は不可分であり、歴史についてこれを自由の歴史と定義する以上によい定義は考えられない。……歴史をつうじて再生し、発展し、成長するのは、ただ一つとして常に自由なのである。」⁽⁴⁾過去の記録は、人間が精神において自由であったときのみより高い政治的・倫理的能力を完全に展開できたことを明らかにしている。かくて自由は人間歴史の本質なのである。

かかる観点は、『十九世紀ヨーロッパ史』(Storia d'Europa nel secolo diciannovesimo, 1932)における歴史叙述の基本的立脚点となっており、精神と自由との関係が一層明確にされている。「歴史は……：精神の作および活動として自己をあらわし、そして精神とは自由であるから、歴史はすべて自由の作として自己をあらわすのである。……自由こそ歴史の唯一にして永遠の積極的契機であり、……自由の歴史としての歴史の概念を、必然的実践的に完成するものは、道徳的理想としての自由そのものである。」⁽⁵⁾「自由の歴史」の指導理念は、人間精神の自己実現に向っての進歩であり、道徳的理想としての自由の「絶えざる獲得・絶えざる解放・絶えざる闘争」⁽⁶⁾にあった。道徳的な善と悪との闘争において、善の基準あるいは内容は道徳的理想としての自由に求められ、この闘争の過程で自由が実現される。自由の理念は、第一章「自由の宗教」に明らかになように宗教の次元にまで高められ、現実の政治制度や国家体制の問題との具体的なかわりあいを探ることがなされないまま超政治的概念として定式化された。この宗教性を内包する自由主義が、それに敵対する諸勢力との闘争の中で自己を確立してゆく過程こそ、クローチェの歴史叙述の主題であった。

クローチェのイタリア近代史にかんする見解は、一九二五年から一九三二年の間に公けにされた四部作をなす歴史著作、『ナポリ王国史』(Storia del Regno di Napoli, 1925)、『イタリア史・一八七一—一九一五』(Storia d'Italia dal 1871 al 1915, 1928)、『イタリアバロック時代の歴史』(Storia dell'eta barocca in Italia, 1929)、『および前述の『十九世紀ヨーロッパ史』において示されているが、とりわけ最後の

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題(中川)

のものにおいて、リソルジメントについてのかれの理解がもっとも明確に表明されている。

前述のような歴史観から、リソルジメントは、ヨーロッパにおける自由の歴史すなわち自由主義に敵対する立場にたいする自由の「絶えざる獲得・絶えざる解放・絶えざる闘争」の過程の一環として位置づけられる。リソルジメントにおいて自由主義に敵対する立場はいかなる立場であったか。それは、「カトリシズム・絶対主義・民主主義・共産主義」⁽⁷⁾である。これらの立場は、「基本的なオポジションであり、自由主義とは全く別の宗教に属するものであって、*mors tua, vita mea* (汝の死は我が生)」という標語の中に表現されるものである。⁽⁸⁾そして他方、イタリアにおける自由主義の旗手は、ピエモンテに求められている。「フランスが……大陸ヨーロッパ全体にたいして果たした役割にも類する役割を、ピエモンテは一八五〇年から六〇年までの十年の間にイタリア全体にたいして果たしたのである。」⁽⁹⁾このような図式から、かれのリソルジメントの評価は次の一文に要約される。「もし政治史において、芸術作品におけるように、傑作を云々することができるとするならば、イタリアの独立・自由・統一の過程は、一九世紀の自由主義・民族主義運動の傑作といわれるに値するだろう。」⁽¹⁰⁾リソルジメントの成果が自由主義の勝利として論ぜられる以上、ピエモンテ王国の全イタリア的拡大として終結したその過程にたいする一片の批判もみいだせないことは当然の帰結である。このように、クローチェは歴史を「自由の歴史」と命題化し、リソルジメントをヨーロッパにおける自由主義の勝利の一過程として論ずる中で、その成果を容認したのであった。こうして、リソルジメントを中心とする十

九世紀イタリアの歴史は、自由主義的理想のもっとも純粋な範例に昇華されてしまった。以上のように、クローチェのリソルジメントの解積は、自由主義の勝利への賛美に終わっていると見てよい。それは、この期におけるかれの歴史叙述とくに『十九世紀ヨーロッパ史』が、「二十世紀における自由の未来にたいするかれの危惧に発現しており、自由主義の諸原理が最大の勝利をかちえていた時代のイメージにもう一度磨をかけることによって、その諸価値に新しい生命をふきこみ、それを破壊する体制に抗しつつあるひとびとに勇気を与えることを期待し⁽¹¹⁾」てのものであったところに原因が求められる。

このようなクローチェの解釈にたいしてはもちろん批判が存在する。まず第一に、ファシズムとの関連において、リソルジメントによって獲得された統一国家の自由主義的発展が、いつしか自由の抑圧者としてのファシズムを生みだすこととなったのは一体なぜか、そこでの自由主義的発展ははたして真に自由の理念を基礎に置いたものであったのか、という内容を含んだ批判であった。これは、一九一九―二二年の政治的・社会的危機、ファシズムの抬頭をリソルジメントの内包する欠陥の自然かつ必然的出口として考察する立場⁽¹²⁾からのものであったが、それは主としてクローチェの「自由」の概念に存する道徳―政治の關係についてのオプティミスティックな判断にたいする批判であり、リソルジメントおよびそれ以降の自由主義のあり方そのものへの疑問を提出したものであった。クローチェが賛美した自由主義の勝利は実際にはいかなるものであったか、この点における政治的な意味での「自由」にたいするかれの判断は、ほとんどあいまいなままに残されていると言つてよい。「自由」が、倫理的・道徳的意識の面で捉え

られ、超政治的概念として用いられるにとどまり、政治的・社会的関連性において考察されなかったところにその実際の限界がみいだされるであろう。自由主義はファシズムの抬頭を前に窒息の危機にさらされたが、クローチェは政治的・社会的「自由」の問題に直面させられてはじめて、自由主義とその敵として数え上げた民主主義とがすでに分ち難く絡みあっていることを認めたのであった。

また、クローチェのヨーロッパ的視点からのリソルジメント叙述にたいする批判が提出されている。ヨーロッパ史は、イタリア半島における統一国家形成に反対する国際的勢力關係の一次的構造を變化させるものとして展開されたのであり、リソルジメントの時代は半島において展開された歴史の中に存する、という見解である⁽¹³⁾。クローチェは、リソルジメントの過程をヨーロッパ史における自由主義とそれに敵対する立場との戦いの一環として捉えることによって、イタリアの内的諸關係を極度に単純化してしまった。これは、イタリアの内在的で複雑な土着の諸要素を無視する結果を導く。ヨーロッパ史的諸状況は決して無視されてはならないが、リソルジメントはなによりもまずイタリアの政治的・社会的・経済的および文化的諸關係の變化に焦点を向けて把握されねばならないであろう。

(1) B. Croce, *Primi Saggi*, 1919, p. 24.

(2) B. Croce, *Teoria e storia della storiografia*, 1926, p. 11. (羽仁五郎訳、『歴史の理論と歴史』昭和二十七年、二六頁)

(3) B. Croce, *ibid.*, p. 16. (羽仁訳、前掲書、三四頁) さらに、この文章につづいて、「こうして精神の歴史は自らの中にその全歴史を伴い、この全歴史は精神そのものと全く一をなす。」

- (4) B. Croce, *Antistoricismo*, 1930, ora in *Ultimi Saggi*, 3a ed., 1963, pp. 260-261.
- (5) B. Croce, *Storia d'Europa nel secolo decimonono*, ora in *edizione economica*, 1965, pp. 12-13. (坂井直秀訳『十九世紀ヨーロッパ史』昭和三年、六頁、八頁)
- (6) B. Croce, *ibid.*, p. 14. (坂井訳、前掲書、九頁)
- (7) B. Croce, *ibid.*, pp. 31-40. (坂井訳、前掲書、三〇頁―四〇頁) 数え上げられた四つの敵対する立場のうち、民主主義との相違は、次のように述べられている。「個人・平等・人民主権の概念は、民主主義者の考える場合と、自由主義者の考える場合とで全く異っていた。前者にとっては、各々の個人は、同等の力をもつ中心点であり、したがって、それらの中心点に、同等の領域を、彼等のいわゆる事実の平等を、付与することが必要とされた。後者にとつては、各個人は人間であり、その平等は、ただ人間の平等、したがって観念的平等ないし権利の平等であり、移動の自由・競争の自由であった。」
- (8) B. Croce, *ibid.*, p. 38. (坂井訳、前掲書、三九頁)
- (9) B. Croce, *ibid.*, p. 187. (坂井訳、前掲書、二二三頁) ただし、ビエモンテの評価として「………独立にして自由なビエモンテは、同時にまた、隷属のイタリア・圧迫されたイタリアの生命を生きていたのであり、この隷属のイタリアの『悲哀の叫び』を、そういう言葉が公けに使われるようになったよりもずっと前に口にしていたのはビエモンテであった。だからビエモンテは、………ヨーロッパにおいて活発な革命活動をつづけていた唯一の国であった」と論じられている。B. Croce, *ibid.*, p. 185. (坂井訳、前掲書、二二〇頁)
- (10) さらにつづけて、「昔のものにたいする尊敬、深刻な革新、政治家の聡明と慎重、革命家や義勇隊の情熱、豪胆と穩健、等々をまよまよな要素が、右の過程の中になんとすばらしくまじりあっていたことだろう。この過程が発展して、ついにその目的を達した経緯は、なんと融通性があるって、しかも首尾一貫してつたことだわい。」B. Croce, *ibid.*, pp.

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題 (中川)

- 198-199. (坂井訳、前掲書、二二七頁)
- (11) S. Hughes, *Consciousness and Society*, 1958, (生松敬三・荒川幾男訳、『意識と社会』一九六五年、一五〇頁)
- (12) ファシズムと自由主義の関係について、戦後のファシズム研究は、ファシズムの起源にかんする問題が中心となり、イタリアの自由主義的発展とファシズムの抬頭の間にかなる関係があるのかという点に、論点となった。この点にかんして、クローチエの立場は、ファシズムを正常な人間生活の発展への乱入者あるいは「偶発事故(incidente)」と規定したが、リソルジメントの自由主義的伝統とファシズムとの間には、何の歴史的關係も存在せず、両者は断絶の関係にあるという断絶説を主張するものであった。
- (13) かかるファシズム抬頭の原因をリソルジメントの諸矛盾の内にみいだそうとする立場にたいして、クローチエと同じ自由主義的立場に立つモスカティ(R. Moscati)は、歴史のプロセスに作用した諸要因を考慮することなく、最初のもの欠陥の中に原因のすべてを求めようとする方法は、反歴史的であると批判してゐる。R. Moscati, *Risorgimento liberale*, 1957, pp. 12-19.
- (14) A. Gramsci, *op. cit.*, p. 42.

三、グラムシのリソルジメント解釈

グラムシは、前述のようなクローチエのリソルジメント賛美を批判し、リソルジメントの限界ないしそれが未解決のまま放置した諸矛盾を検討することによって、実際のリソルジメントとあるべきリソルジメントとを対比させて論じている。リソルジメントは、イタリアにおける政治と社会の根本問題を解決すべき革命であり、その行動は、その目的を達成するための勢力を動員し指導する革命行動でなければならぬ。だが、この革命は、ビエモンテ王国を中心とする旧来の支

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題（中川）

配層が主役となって妥協的に遂行されたがゆえに、不完全なものにとどまり、グラムシの描くあるべきリソルジメントのモデルすなわち西欧先進国における革命とは大幅に異なったものであった。何故、イタリアにおける革命が、先進国イギリス・フランスの辿ったコースと異った方向に進まざるをえなかったのか。この疑問を出発点として、グラムシのリソルジメント研究は民衆の不在をその原因たる革命の指導の欠陥の問題、とくに革命的階級および集団の政治指導の問題に集中されている。⁽¹⁾

その際、かれの視角は、クロッチェとは逆にまずイタリアの内在的・独自の要素を検討するところにある。リソルジメントは、「イタリア生活の試として、新しいブルジョアの形成として、都市的および地方的のみならず国家的問題意識の増大として、一定の理念要求の受容として……」⁽²⁾把握されねばならない。つまり、「……単なるイタリアの事実としてのみならず、イタリア人を新しい思想・新しい活動そして新しい政治的準備へと促す文化的潮流、経済的異変、新しい国際情勢と関係のあるヨーロッパ生活の舞台で」⁽³⁾論ぜられねばならないのである。

このような観点から、リソルジメントにおける政治指導の問題に目を向けると、政治指導を担うべき民主主義的諸潮流の弱体さが指摘される。その歴史的原因にかんする論究は、この弱体さがイタリアブルジョア全体に未成熟に帰因することを明らかにしている。「……ブルジョアが、イタリアで権力を獲得した歴史過程と……フランスやイギリスおよび他の諸国で権力を獲得したさまざまな歴史過程

との比較は、まさに、イタリアに特定の国家や特定の政治―社会情勢を形成させた歴史発展の特徴を決定するのに役立つ」⁽⁴⁾リソルジメントの比較すべき対象は、フランス革命であり、それはリソルジメントの欠陥の所在を明らかにするに示唆を与える。

リソルジメントとフランス革命との比較において、グラムシは後者におけるジャコバン主義(Giacobinismo)の役割に注目し、前者におけるその欠如に言及している。フランス革命において、ジャコバン派は「無慈悲な闘争」でもって、常にブルジョア革命の渦中にとどまっていたブルジョアジーを前進させることにより、「情勢を無理やり促進し、取返しのつかぬ既成事実をつくり上げる」中で、「指導政党としてのかれらの機能をかちとった」⁽⁵⁾リソルジメントにおいて、ジャコバン派的役割を果すべき党派は行動党(Partito d'Azione)であったが、それは穏健派(Moderati)をつき動かしえなかったのみならず、逆に「カヴール(Camillo Benso Cavour)と国王によって『間接的に』指導された」⁽⁶⁾のである。かかる行動党の弱体さは、基本的には前述のイタリアにおけるブルジョアジーの未成熟に由来するとしても、何故行動党が穏健派の綱領に対抗しうるジャコバンの綱領を作成しえなかったのか。グラムシの問題意識はこの疑問に到達した。

「穏健派に有効に反対するためには、行動党が農村大衆、とくに南部農村大衆と結びつかねばならぬこと、気質という外面的『形式』からだけでなく、とくに経済的、社会的内容によって『ジャコバン黨員』であらねばならぬことは明白である」⁽⁷⁾そうして、「……人民大衆の、なかならず第一に農民の基本的諸要求を反映する有機的綱領を」掲げ、「穏健派が發揮した『自然発生的』牽引力に、計画にもとずく『組織

された』抵抗と反撃が対置されるべきであつたらう。』つまり、行動党が自立的勢力となるためには、国民の五分の四を占める農村大衆に依拠し、かれらを運動にひき込むための政策、すなわち農村における諸関係の変革の問題を提起する必要がある。かかる課題を認識しえず遂行しえなかつたがゆえに、行動党はリソルジメントを「フランス革命」にすることができなかったのである。

こうして、グラムシは、リソルジメントが何であつたかではなく、何でなかつたかという視点から検討し、それを農業革命の欠如した不完全な革命であると結論づけた。このようなかれの方法は、近代イタリアの発展過程にあらわれた諸矛盾を、リソルジメントの孕んだ諸要因の検討にまで溯つて理解し、リソルジメントが未解決のまま放置した諸問題をあらためて考察の対象としたものであつた。

グラムシの提出した解釈が指摘している多くの問題点の中でも、かれの問題提起にみられる過去の歴史の選択可能性の問題、つまり、リソルジメントが別の発展の途を辿ることが歴史的に可能であつたかの問題は、われわれに疑問をいだかせるであろう。事実、この点にたいして、多くの歴史学者からの批判が集中した。その中でも最も明確で鋭い批判を提出したのは、自由主義的立場に立つ若手歴史家ロメーオ・オスチオ(Rosario Romeo)であろう。かれは、「マルクス主義の政治的歴史叙述」(La storiografia politica marxista)と「一八六一年—一八八七年のイタリアにおける資本主義発展の諸問題」(Problemi dello sviluppo capitalistico in Italia, dal 1861 al 1887)とこう二つの論文において、グラムシのリソルジメント論の全面的批判を試みた。すなわち、

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題(中川)

ロメーオは、グラムシの農業革命の欠如した不完全革命という解釈を次のように批判している。(一)グラムシのテーゼは、その政治的イデオロギーの立場によるものであつて、客観的な歴史の検討によつて引きだされたものではない。(二)グラムシは、イタリアの情勢と「フランスの情勢の根本的相違を無視し、リソルジメントをフランス革命と対比する誤りをおかしている。(三)イタリアの後進的な経済社会的構造からして、リソルジメント期に農業革命は不可能であつた。(四)グラムシの主張するジャコバンの革命がイタリアに実現されていたならば、それは小所有者—耕作者の広範な層をつくりだし、商業的・工業の後進国イタリアにおける資本蓄積を遅らせて資本主義的経済の発展を阻害したであろうから、ジャコバンの革命が実現しなかつたことはイタリアにとって幸であつた。」

このロメーオの批判は、多くの注目すべき点を含んでおり、この問題にかんする一つの論争をひきおこした。論争の過程で、ロメーオの主張に正当といえない部分が多々あることが指摘されたが、それにもかかわらず、かれの批判は依然としてグラムシの提出した解釈における基本的な問題点を含んでいると思われる。それらの評価は、グラムシの解釈とロメーオの批判との詳細な検討を必要とするが、それは本題との関係で別の機会に譲るとして、一、二重要と思われる点にふれておこう。「リソルジメントが何でなかつたか」というグラムシの出发点は、確かに革命を推進する立場からのものであり、政治的イデオロギーの関心によるものである。だが、リソルジメントの諸要素にかんするかれの研究は、けつして政治的イデオロギー的のゆがめられているとは言い難いし問題意識を生み出した政治的イデオロギー的立場

「イタリア・リソルジメント」研究の諸問題(中川)

が、かならずや、研究の方法や内容をゆがめるとは言えない。それは、リソルジメント以後イタリア史の辿った過程が、「イタリアにとって、近代国家としての構造と特徴への最も早く、また最短の歴史的な道」であつたと論じ、近代イタリア経済の発展過程を合理化しようとするロメーオの主張と比べるとよくわかるであろう。さらに、リソルジメントが別の結果をもちえたか否か、というグラムシの問題提起にみられるような過去における選択可能性を論ずることは、確かに時には意義をもちえない場合もある。しかし、逆に、現実に生じた結果を正当化し、しかも、それが最善のものであつたと論ずる前述のようなロメーオの主張は、歴史研究における客観的態度によるものとは言えない。グラムシの問題提起は、その点において、リソルジメントの諸事実をゆがめるものではなく、イタリアの国民的発展の道を追求しリソルジメントの批判的再検討をおこなうための礎石であつたのである。

- (1) A. Gramsci, *op. cit.*, pp. 69-95. (前掲書、二二五—二六五頁)
- (2) A. Gramsci, *ibid.*, p. 48.
- (3) A. Gramsci, *ibid.*
- (4) Istituti. Antonio Gramsci, *op. cit.*, p. 520. (前掲『グラムシ研究 I』、一七〇頁)
- (5) 「つまり、フランスにおいて、ジャコバン主義は、「……フランスのブルジョアジーを……歴史的前提が許容する限りのもつとも進んだ立場よりも、はるかに前進した立場にみちびくことによつて……フランスのブルジョアジーにたらしめて自己を貫徹したのである。」A. Gramsci, *ibid.*, p. 84. (前掲書、二四七頁)
- (6) A. Gramsci, *ibid.*, p. 70. (前掲書、二二五頁)

- (7) A. Gramsci, *ibid.*, p. 81. (前掲書、二四二—二四三頁)
- (8) 穏健派と行動党との比較において、行動党の弱体さは次の理由による。「穏健派は比較的同質の社会集団を代表していた。そのために、かれらの指導は比較的に限られた振動を受けたにとどまった。しかし、いわゆる行動党は一定の歴史的階級に特別依拠していなかった。そして、かれらの指導機関が蒙った振動は結局穏健派の利益によつて規定されていた。」A. Gramsci, *ibid.*, pp. 69-70. (前掲書、二二五頁)
- (9) Cf. A. Gramsci, *ibid.*, pp. 95-104. (前掲書、二六六—二八〇頁)
- (10) この二つの論文は、雑誌《Nord e Sud》 agosto-settembre 1956 年 5 月号、luglio-agosto 1958 に掲載され、それぞれに一九五九年、*Risorgimento e capitalismo*. といふ表題で一冊の本として出版された。
- (11) R. Romeo, *Risorgimento e capitalismo*, 1959, chap. I.
- (12) R. Romeo, *ibid.*, p. 49.

結

前述のことから明らかなように、リソルジメントにかんしてさまざまな解釈が提出され、数多くの論争が展開された。リソルジメント研究は単に過去の歴史的諸事実の考察にとどまらず、とくに将来におけるイタリアの進むべき方向への展望と繋がっていたがゆえに、それはすぐれてシビアーな内容をもつ政治的論争の性格を強くあらわさざるをえなかつた。

本論で詳しく述べたので繰返すことは差し控えるが、さきにとり上げたクローチェとグラムシの所説も、いわば相対立する内容をもつものであつた。すなわち、前者は自由主義的—現状維持的立場から、後

者はマルクス主義的—現状変革的立場からの。相対立する勢力を代表する二人の思想家のかかる立場の相違は、両者の問題意識、対象としての事実選択、アプローチの方法等々を厳しく規定し、その所説の中に根深く織り込まれている。自由主義の勝利としてのリソルジメントあるいは農業革命を欠如した革命としてのリソルジメントの評価は、もちろんかかる立場の相違と緊密な関連性をもっているのである。それらは両者の思想の全体からあらためて検討を加えるならば、さらに相違点・対立点が明確にされよう。

リソルジメント研究の初期より存在した解釈の対立は、その後の政治的現実の生々しさの前に、さらに一層の分裂的傾向を強めた。このような深刻な解釈の対立こそ、リソルジメント研究の困難性を示すものといえよう。この困難さを前にして、リソルジメント研究は、客観的あるいは客観性という常套句を用いまいまでも、歴史的諸事実のさうらに内面に立入った検討を必要とする。本論の始めでふれたリソルジメントの複雑かつ矛盾した諸要因、とりわけ、さまざまな国内的・国際的勢力の盛衰の問題、政治的・経済的・社会的諸関係の変化の問題等々を、ここではとりあえず指摘するにとどめておかねばならないが、イタリア史の全体性の中でその根底から把握しなおすことが要求されるであらう。